

第 22 期第 12 回神奈川県内水面漁場管理委員会議事録

日 時 令和 7 年 11 月 21 日 (金) 午後 1 時 55 分から午後 2 時 25 分

場 所 神奈川県庁 新庁舎 8 階「議会第 2 会議室」

議 題

1 報告事項

(1) 全国内水面漁場管理委員会連合会東日本ブロック協議会の開催結果について (資料 1)

2 その他

(1) 令和 8 年 2 月の委員会開催日程について

(2) その他

出席者

・委 員 漁業者委員

小島 善光、濁川 謙二、萩原 季、平田 英二

学識経験委員

井貫 晴介、内田 和男、津谷 信一郎

・事務局

原事務局長、広瀬事務局長代理、竹村主事、河野主事

・県水産課

小川担当課長、仲手川 GL、加藤(大)技師

議 事

原事務局長

それでは定刻前でございますが、皆様お揃いですので、これより委員会を開催いたします。

委員の皆様の出席状況について御報告いたします。本日は 10 名中 7 名の委員の御出席をいただいており、漁業法第 145 条第 1 項の規定を満たしておりますので、委員会が成立することを御報告申し上げます。

それでは議長よろしくお願ひいたします。

議 長

(井貫会長)

ただいまから第 12 回の委員会を開会いたします。本日の議題ですが、報告事項が 1 件とその他となっております。

なお、その他の（2）その他で、水産課から説明があるということです。

それでは、議事に入る前に本日の議事録署名人を指名させていただきます。濁川委員、内田委員、よろしくお願ひいたします。

両委員

（了 承）

議 長

それでは議事に入ります。まず報告事項（1）「全国内水面漁場管理委員会連合会東日本ブロック協議会の開催結果について」を議題としますので、事務局から説明をお願いします。

事) 広瀬代理

【資料 1 に基づき説明】

ただいま事務局から説明がありましたが、何か質問等がありましたらお願いします。

内田委員何かございますか。

内田委員

私は出席していたのですが、外来魚の個体数を減らす方法のところで、水研センター等、県の試験研究機関が開発してきた方法のうち、現場で使われているものがやはりまだまだ少ないと感じました。

例えですが、長野県の青木湖は、ブラックバスのオス親が産卵床を作つてメスに産卵させて、その場を守るのです。そのオス親を除去すれば、周囲にいるウグイ等が、卵や孵化仔魚を食べてしまいます。おそらくそういういくつかの事例を水産庁の事業でも挙げていると思うので、現場で簡単にできる方法を、それぞれの現場に合った方法ですけれども、どんどん使ってもらえればと思いました。

また、今回お話は出なかったのですけれども、ウナギの漁獲制限について、保全をすると言っている一方で、シラスウナギは採り放題であるという意見もあります。シラスウナギについては、以前も議長から、内水面漁場管理委員会ではあまり土俵に上がっていないという話がありましたけれども、現場では、親ウナギを保全するのに、シラスウナギは採り放題ではないかと

いう意見もあります。

大枠は日本と中国と韓国で池入れ量を決めたわけですよね。それを上限としてやっているのですけれども、以前もお話しさせてもらいましたけれども、採捕する側、神奈川県でも江ノ島の周辺でも掬って採っているのです。神奈川県には養殖場がないからという話でしたけれども、採捕者が採った量と、養殖場に入った量が一致しないので、県の単位でも、漁協の人にも説明ができるような、これぐらいの制限で、これぐらい採ったのをこちらに持っていたのだと、その行き先を現場でしっかり見ていただければと思いました。

やはりせっかく試験研究機関が開発している色々な手法が、現場に通じていないことが結構あるという感触と、それからカワウで困っておられたお話が以前の委員会でもありましたけれども、水産研究・教育機構水産技術研究所の坪井さんを呼び、このような場所だけれどもどうすればよいか、現場に来てやってもらう。内水面漁場管理委員会の中でも、こちらから呼んで、この場所ならどういう対策だというのを現地調査でやってもらいながら進めれば、もっと早く対策できるのではないかと思いました。

議 長

ありがとうございます。他に何か御質問よろしいですか。

それでは報告事項ということで、了承ということにさせていただきます。

次に、水産課から説明があるということですので、お願ひいたします。

水) 小川担当課長

4月の委員会で内田委員から、背掛りアユの親について御質問がございまして、関連する内容について、内水面試験場に確認を行いましたので、関連する情報も含めまして、御報告をさせていただきたいと思います。

まず、当時の質問は、友釣りで釣れたアユは早生まれかどうか、耳石等を見て判断したり、遡上のタイミングなどを把握していないのか、早生まれのものほど早く遡上して、縄張りを持つ確率が高くなるのではないかというものでございました。

この質問に対しまして県からは、耳石の確認や、早生まれかどうかの検証は行わず、あくまでも友釣りで釣れたという結果のみを重視して親として利用しておりますと回答させていただきましたけれども、内水面試験場にも確認しましたところ、この方針には誤りがないということでしたので、友釣りで釣れたかどうかということのみでDNA等は確認せずに使っているということでございます。

ここで一般論といいたしましては、御指摘のとおり、早生まれのものは早く大きくなつて、縄張りも作りやすいですし、また、縄張り性に最も影響を与

えていると考えられる項目は体重であるということも知られておりますので、御指摘のとおり結果的には早生まれのものが用いられていることになるのではないかと思います。検証していないということですけれども、早生まれだろうということです。

実際に、背掛りアユの親として用いているアユを、うろこの数ですか、頸の穴の数などで、外観上から判別すると、おそらく海産由来だらうと担当者が述べていましたので、早生まれの海産を結果的に使っているだらうということになります。

関連する情報といたしまして、内水面試験場の取組について御紹介させていただきます。内水面試験場が取り組んでおります、背掛りアユの子孫が釣れやすい性質を受け継いでいるかどうかについての評価の確認をいたしましたので御紹介します。

この評価については、現在は遡上する能力や縄張りを形成する能力を測ることで評価を行っているということでした。統計的な検証はこれからということなのですけれども、まず、背掛りアユの遡上する能力については、親を何代も試験場で飼っている長期継代よりは優れており、短期継代との比較では、遜色はなかったということなので、やはり自然味がある程度あるのは当然ですし、長期継代よりは優れているだらうということでした。

一方、縄張りを形成する能力につきましては、F8、8代目ですので少し長いのですけれども、F8と比較を行いましたところ、背掛りアユの子孫は縄張りを形成しやすいだけではなく、動き回ることで他者を追い払うなどの行動が認められ、このような動きについては、客観的に評価、比較するための新たな指標を設けることを検討する必要があるかもしれませんけれども、縄張り自体は形成しやすいということでした。

今の説明の、動き回るというのは何の話をしているかと言いますと、縄張りの形成しやすさの調査については、愛知県の木曽川のアユを対象にして実験を行ったものを参考に検証しているということなのですけれども、この愛知県の評価ですと、勝敗があった場合、一方的に他者を攻撃しているものが勝ち、それから引き分け、両者とも攻撃しない場合や、攻撃と守りが入れ替わる場合を判定して、勝利した日数が多い個体を勝者とするという基準だそうです。要は、勝っているか引き分けがあった時に、どちらが勝っている日数が多いかというのを評価するというものです。先程述べました、動き回ることで他者を追い払う行動というのは、この評価の中にはありません。愛知県でそういった事例があるのかないのかはわかりませんけれども、そういう

た動きが見られて、結果的に縄張りを形成しやすくなっているようなので、ここについては新たなパラメーター等を用意して評価すべきなかどうかを担当者が考えていくということでした。結果としては、愛知県の例に倣えば、縄張りの作りやすさがあるようですので、背掛りアユは他の県の種苗と比べても、遡上性についても縄張り形成についても優れているという結果が今のところ出ているようです。

いずれにしても次年度も引き続き背掛りアユの安定供給のための取組を最優先に行った上で、実際の河川での釣れやすさ等も含めた種苗性の評価についても検証を行うと聞いておりますので、引き続き何か情報がありましたら、こちらの委員会でも御報告させていただきたいと思っております。以上です。

議長

今の説明につきまして何か御質問、御意見等ありましたら、お願ひいたします。

内田委員

調べていただきどうもありがとうございます。

群馬県で20年ぐらい継代飼育したロットがあるのですが、それは9月中旬に採卵してしまい、早生まれのものを育てて、それで川に放流しています。やはりよく釣れるのです。ただし濁りが出たら下るなど、遡上性はあまりないのですけれども、放流した直後に縄張りを持つのはやはり早生まれで、琵琶湖の中でも、大鮎、小鮎と分けていますけれども、同じ年に河川に遡上したものと、湖中で群泳して、川には産卵の時に少しだけ寄るものがいるのですけれども、早く卵を産むのは湖中で群れていたものです。そしてヤナで採れる川に上ってきたものは、後から産卵するのです。翌年になると、早生まれのものがヤナに上がってきます。そのため琵琶湖の中には、遺伝的には全く差はないのですけれども、いわゆる友釣りで釣れる、川によく上るものと、湖中で群泳しているものが毎年逆転するのです。そして遺伝的によれがなく早生まれのものがよいという、かなりクリアなデータが出ていて、そういうものを人工種苗や種苗生産の現場でも想定すると、早く産卵できるものを親に使えば、それだけで解決するのではないかと思いまして、それで質問をさせていただいたのです。

先日坪井さんと話をした中で、海の方から遡上してくる場合でもやはり早生まれのものが早く縄張りを持っているという、何だそんなことかというのが彼の結論だったのですけれども、地元のアユを大事にしましょう、地元で早く上がってくるものを使って親にすれば、一番面倒くさくなくてよいのではないかというのが、坪井さんの意見でもありました。現場では大変だと思

いますけれども。

水) 小川担当課長 まさに御指摘のとおりで、担当者の個人の意見では、友釣りのアユの中でも、早く釣れたものを親にすればよいのではないかと思ってはいるようなのですが、親の集まりやすさですとか、あとは飼育していても、産卵する時期が非常に長くなっていて、ぶれるのです。そのため当面はやはり安定供給を先に目指したいと。そちらに尽力をしつつ背掛リアユを安定生産できるようにしていきたいということです。色々なアイデアがあるようなので、また他県の情報等も得て、取り組んで参りたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

内田委員 千葉県では同じような発想で、飛び跳ね行動を見て、跳んだものと残ったもの、同じ個体が何回か跳ぶのをカウントしたかどうかはわからないですけれども、それがおそらく友釣りで釣れるだろうということでやられています。それはそれで1つの目安になるので、方向性としてはよいと思うのですが、今言わされたようにとにかく量産できるような体制というところに主眼を置いてもらった方がよいようにも思います。

水) 小川担当課長 施設がなかなか冷たい水を安定的に供給できないのです。冷やすと非常にまとまったタイミングで卵を産むのですけれども、水温が高いままなので、産卵時期がぶれてしまう、長くなってしまうのです。そのため、卵の供給も少々不安定なところもあるようなので、施設を建て替えるわけにはいかないですし、その限られた施設の中で、頑張っているということでございます。

議 長 他にどなたか、よろしいですか。

本日の議題は終了ですが、何か委員の皆様から御発言等ありましたらお願ひします。よろしいですか。

水産課、事務局、何かありますか。

ないようでしたら、本日の委員会はこれで閉会とします。

次回の委員会は12月18日木曜日、16時から委員会を開催し、その後忘年会の予定となっておりますので、体調を整えて御参加ください。それでは本日はこれで終了します。